



俳諧十家類題集

春

~ 5
6636
1



門人 粘
除籍 卷

八五
6636
1



滄海のほとけも出づまれば此のまじ
る事や何れも成はばとある深淵
風流の事廣くも今や之湯云
す事多しはるる久々其乃四
海に溢れし事なる海に十
乃風潮を集むる所の何れか
有將其形

藤野清氏遺愛之記



明治三十四年四月廿四日
藤野清氏

意の存焉馬といふあれと見易きもの
に力大かちかゝるに墨して其の
解のいふをわの世に遊ぶの
感慨志厚をいふ酒を飲れ
のうさほし好むと方たはふの形
古より心を清温古をはるる志
かゝる形しむるは基をの便をもた

序一



源平抄



意の存焉馬といふあれと見易きもの
に力大かちかゝるに墨して其の
解のいふをわの世に遊ぶの
感慨志厚をいふ酒を飲れ
のうさほし好むと方たはふの形
古より心を清温古をはるる志
かゝる形しむるは基をの便をもた

久しき歴史を懐憶の遠い
 のぼる及の階よりの空を彌る
 寛政二年
 浪華
 未仲替日
 増村
 謝志

序二

俳諧十家類題集春之部

○ 目錄

正月	睦月	初空	今朝春	明の春
初春	千々春	初代春	花春	春之
元日	初日	歳旦	三朝	年立
日の春	年新	二日	齒朶	齒固
惠方棚	門松	樺	松銚	銚竹
四方拜	若水	雜煮	蓬菜	食積
野老	小殿原	年男	庭寛	年玉
破魔方	試巻	巻始	初爰	着衣始
				寶引

寶船	あね	子の日	初寅	薺	きんらこ
菜摘歌	七種 <small>ユ</small>	若菜	帳後	十一日	踏分
廿日月	懸石 <small>六</small>	法忌詣	東風	春風	春雪
雪消	雪間	福寿軒	蕨の臺 <small>七</small>	至 <small>五</small>	若草
春の山	春野	杉菜	梅	八 <small>八</small>	臥龍梅
柳 <small>十二</small>	青柳	霞	雪 <small>五</small>	春雪	百千鳥
春夜	春夕	や春	春の宿	宵の春	白魚 <small>五</small>
海苔	春の海	春の水	藪入 <small>大</small>	二月	衣更着
傳奏下 <small>リ</small>	初牛	薪能	二月堂 <small>九</small>	吉野餠配	涅槃
彼岸	水間	春写	撒月 <small>千</small>	春月	出代 <small>リ</small>
雛子 <small>廿</small>	燕 <small>廿</small>	春鷹	行鷹	帰鷹 <small>廿三</small>	雲雀

目録



蒼子	親蒼	蝶	蛙	雨蛙	暮
猫亥	陽炎 <small>共</small>	田螺	蜷	蛤取	馬刀
飯蛸	初櫻 <small>廿一</small>	糸櫻	椿	櫻植	接木
燒野	とろろ	畑 <small>廿</small>	耕	種下 <small>レ</small>	種俵
種 <small>一</small>	苗代	芥	芥花 <small>廿三</small>	土釜	菜の玉
烏賊	獨活	芽 <small>三</small>	山葵	狗脊	蕨 <small>廿四</small>
几巾	春雨 <small>廿五</small>	三月	上巳	掘節 <small>廿六</small>	雛 <small>廿七</small>
草餅	園鷄	曲 <small>廿八</small>	汐 <small>廿九</small>	貝拾	青精飯
卷鎮	寒食	佛身拭	極 <small>廿九</small>	海棠	梨花
花 <small>卅</small>	櫻 <small>卅一</small>	櫻 <small>卅二</small>	花衣	落 <small>卅三</small>	阿蘭陀
櫻鯛	青 <small>卅四</small>	和布	傀儡飾	青麦	ほ <small>卅五</small>



明け春

日のひかりと初春の朝のからり

蕪村

春

雪の中は春の気もあつた

其角

初春

山海は春のそとに春の気

嵐雪

春

春のまはるは春の気

其角

千々春

春のまはるは春の気

其角

初春

春のまはるは春の気

其角

先春

春のまはるは春の気

芭蕉

春一

春

春のまはるは春の気

嵐雪

春

春のまはるは春の気

希因

春

春のまはるは春の気

素堂

春

春のまはるは春の気

言水

春

春のまはるは春の気

芭蕉

春

春のまはるは春の気

其角

春

春のまはるは春の気

其角

春

春のまはるは春の気

其角

春

春のまはるは春の気

其角

春

春のまはるは春の気

其角

初日	えりやせんをたのむる	来山
歳旦	えりやせんをたのむる	来山
三朝	えりやせんをたのむる	来山
年立	えりやせんをたのむる	来山
新年	えりやせんをたのむる	来山

友二

初日	えりやせんをたのむる	来山
歳旦	えりやせんをたのむる	来山
三朝	えりやせんをたのむる	来山
年立	えりやせんをたのむる	来山
新年	えりやせんをたのむる	来山

友二

雜煮	人ひまゐる 新煮かゝり 煎茶のつぼ	言水
若水	あはれや 常のや 流るる 水や	嵐雪
四方拜	あはれや 常のや 流るる 水や	言水
餠縄	あはれや 常のや 流るる 水や	其角
餠竹	あはれや 常のや 流るる 水や	其角
松餠	あはれや 常のや 流るる 水や	芭蕉
楪	あはれや 常のや 流るる 水や	嵐雪

壽
三

雜煮	人ひまゐる 新煮かゝり 煎茶のつぼ	言水
若水	あはれや 常のや 流るる 水や	嵐雪
四方拜	あはれや 常のや 流るる 水や	言水
餠縄	あはれや 常のや 流るる 水や	其角
餠竹	あはれや 常のや 流るる 水や	其角
松餠	あはれや 常のや 流るる 水や	芭蕉
楪	あはれや 常のや 流るる 水や	嵐雪

穂	依	ほろいしや	深松の穂の白向科	沾徳
野	老	とくろうしん	大島の黒ひさり	其角
		<small>年余歳 北見</small>	海老の産を越ぬる小原系	言水
年	男	白魚のり	も機きり一年男	其角
庭	寛	庭寛牛	も新志を居るま	其角
年	玉	やま	も梅おる小原の産り乳	言水
羽	子	<small>まはせな</small> 我まはせな	おのり羽子	其角
破	麩	破麩	もやしゆの産り天王	其角
		<small>二月</small>	もやしゆの産り天王	来山
試	筆	かたむね	も筆耕もも田のり	沾徳

華	始	大津路の	草のり	芭蕉
初	夏	初夏	や	其角
着	衣	着衣始	花の産り	言水
実	引	実引	も	其角
実	船	実船	も	嵐雪
水	祝	水祝	も	其角
子	の	子の日	も	嵐雪
初	寅	初寅	も	其角

齋	少	百人	ぬき	風後	蘇	煙	た	ま	七
齋	少	百人	ぬき	風後	蘇	煙	た	ま	七
其角	其角	其角	其角	其角	其角	其角	其角	其角	其角

其角	希	嵐	其	若	其	其	其	其	其
其角	希	嵐	其	若	其	其	其	其	其
其角	希	嵐	其	若	其	其	其	其	其

懸	召	廿日	踏歌	十一日	帳祝	来
えんりよとくともぬ衣そりくさけし	四月廿日よきくして終者よる	常やぬそ神代きくやうかき	おけおき還深樂のなりくつる	あきと原成りくさくしけのこけ目	雪のそやうも来もくうのけひり	弱下弱の神向衆人くさくつるは
言水	嵐雪	言水	其角	其角	言水	来山

云云

御忌指	東風	春風
清きりつ子四別子命 曉き	あけのきやのよき日の子林	あけのきやのよき日の子林
言水	其角	其角

蘇村

春雪	雪消	雪間	福寿竹	落り菫
片所よりこぼれし海もやその風	北園のまろふくもさるる雪消の如	福寿竹一寸の如くぬたす柳	弱くもやそらるる梅は落り菫	梅の香もやほろろと散らさる
来山	沾徳	其角	言水	麦林
其角	其角	其角	其角	其角

嘴のむらさきの暮やまのつら
 竹の香もや柳をのびのさのる

春雪	雪消	雪間	福寿竹	落り菫
片所よりこぼれし海もやその風	北園のまろふくもさるる雪消の如	福寿竹一寸の如くぬたす柳	弱くもやそらるる梅は落り菫	梅の香もやほろろと散らさる
来山	沾徳	其角	言水	麦林
其角	其角	其角	其角	其角

嘴のむらさきの暮やまのつら
 竹の香もや柳をのびのさのる

杉菜

梅

治徳

芭蕉

沿くいのあひてしちち杉菜舟
 山あふるる景はし梅のこれ
 やしむとく枝の中なる梅の子か
 さる鳥さし菜の梅のりたるよる
 こころまよ藪の中なる梅のこ
 梅の影をまよここの影のうま
 梅の影に乃りし日のさきと影代
 らるるささるるささるる梅の影
 夢みる梅よささるる風しこぬ
 夢の影ささるるささるる梅の影

三ノ八

小神長せも併はねえむめりりま

其角

霜のむえぬつらつらつらつら
 ばと枝のわたるるるぬやほほ梅
 むえのたまはぬをささるるるら
 ささるるささるるささるるささるる
 梅の名をささるるるささるるささるる
 夢みる木のおくつらささるるささるる
 けつらつらつらつらつらつらつら
 乙日月のさあおれつらつらつら
 つらつらつらつらつらつらつらつら

樹をばつら

衣明王

猿押のこまきるうたに梅の志 其角
 石八のくひてまや一團乃 梅
 梅さくく雪定りの星月白く梅
 氷肌玉氷肌玉 芳々うー花ももきうも梅の皮
 せんとくこのかえと梅ふむめのお
 あせを紙目あても梅乃よほひが
 きよよいさきさうひてやむめれさ
 梅う香もしを食のあも歌うう
 清松をふいさきを梅を梅えん
 梅一編つらんうのあううと
 嵐雪

九
 嵐雪

梅よ結く梅をぬきうう月あ
 梅あうや一遠のまらるる梅しれ
 梅干しやえんかうう居るう梅の志
 この梅を遠く月の山月ひうれ
 梅さくむる梅さくさくさるる梅の
 月の山月ぬ背中を梅のあうや
 梅の香やいらううう梅の風
 ふえふう笑や梅のよさ梅のし
 梅の花夕よふいうう梅の
 来山
 希因

来山
 希因

梅の香もや 陸のみの 花もどか 滅はし
 只とらへ 入るるを かくさし 梅の香
 梅もく 雪をく 門の傍に ひとり
 十の町 舞のまはりに ひとり ひとり
 羨む ひとりの 古のまはりに 梅の香
 ちと 梅の 山々の 茶の ひとり
 ちと 梅の 枯木の まはりに 月夜
 白雲の 花の まはりに 梅の香
 梅の香 梅の 花の まはりに 梅の香
 ちと 梅の 花の まはりに 梅の香

麦林
 言水
 蕪村
 六歌

梅の香もや 陸のみの 花もどか 滅はし
 只とらへ 入るるを かくさし 梅の香
 梅もく 雪をく 門の傍に ひとり
 十の町 舞のまはりに ひとり ひとり
 羨む ひとりの 古のまはりに 梅の香
 ちと 梅の 山々の 茶の ひとり
 ちと 梅の 枯木の まはりに 月夜
 白雲の 花の まはりに 梅の香
 梅の香 梅の 花の まはりに 梅の香
 ちと 梅の 花の まはりに 梅の香

出歌
 芭蕉
 時林
 五林
 嵐雪
 蕪村
 六歌

相續録
 五林

霞

青林

まろりれやうんねんりやうねん
ねんりもまろりねんりやうねん
ねんりやうねんりやうねん
ねんりやうねんりやうねん
ねんりやうねんりやうねん
ねんりやうねんりやうねん
ねんりやうねんりやうねん
ねんりやうねんりやうねん
ねんりやうねんりやうねん
ねんりやうねんりやうねん

芭蕉
沾徳
嵐雪
希因
言水
蕪村

三十四

鶯

まろりれやうんねんりやうねん
ねんりもまろりねんりやうねん
ねんりやうねんりやうねん
ねんりやうねんりやうねん
ねんりやうねんりやうねん
ねんりやうねんりやうねん
ねんりやうねんりやうねん
ねんりやうねんりやうねん
ねんりやうねんりやうねん
ねんりやうねんりやうねん

芭蕉
沾徳
其角

春の宿

折行は鳥帽ふりさくくまの宿

蕪村

春の春

筋道よふくくんあふくく春の春

春

肘白く傍のくく麻巾春の春

公をさくく狐作くく春の春

春の春梅よあふくく白牡丹

白魚

白魚やあふくく月をくく法り網

百十

菜摘はくくふくくをくく春の春

春の春

ふくくのをくくらねくく川きり

白魚や海苔をくく下巻の罽合

ふくく海苔をくくさくくさく

蕪村 十七

海苔

白うたやあふくくくくくあふく

来山

あふくくくくくくくくくくく

其角

春の海

あふくく海苔白くくくくく

蕪村

春の水

あふくくあふくくくくくく

其角

あふくくあふくくくくくく

沽徳

あふくくくくくくくくくく

蕪村

あふくくくくくくくくくく

蕪村

初牛

くろ牛やしろ牛の乳母たう有

沾徳

卯牛や辰の乳ふむる人

其角

いのらふりやひそめてや

其角

左系
の
牛

卯牛や養子よるをま居り

卯牛やそのふくり種

蕪村

くろ牛やしろ相四流の乳

くろ牛やあやうい

地風のそえ

沾徳

拿や其のあ

其角

二月堂

くろ牛や秋の倍れ

芭蕉

十九

薪能

かく井戸の流流たふる

言水

灯る火のく

二月堂

燐配り園極人

其角

嵐やう

言水

堂を

言水

釣りの大

希因

移る人

其角

老婦の死

其角

石も

其角

牛の角

其角

言水

不生不滅の
くろ牛

言水

言水

彼岸

彼岸の舟を渡る

其角

彼岸の舟を渡る

来山

彼岸の舟を渡る

燕村

水間

水間の舟を渡る

其角

春宵

春宵の舟を渡る

来山

臘月

臘月の舟を渡る

言水

臘月の舟を渡る

其角

臘月の舟を渡る

其角

臘月の舟を渡る

其角

臘月の舟を渡る

其角

其角

七

月夜舟を渡る

来山

月夜舟を渡る

月夜舟を渡る

月夜舟を渡る

月夜舟を渡る

月夜舟を渡る

月夜舟を渡る

月夜舟を渡る

月夜舟を渡る

月夜舟を渡る

月夜舟を渡る

月夜舟を渡る

月夜舟を渡る

月夜舟を渡る

月夜舟を渡る

月夜舟を渡る

月夜舟を渡る

月夜舟を渡る

月夜舟を渡る

春月

きつねをさすくぬくおや御月

蕪村

春月や下合堂の木のるり

沾徳

あつらひの門は後居の鳥

蕪村

出代り

あつらひの鳥知んよのあつれ

嵐雪

東朝
あつれ

あつらひの鳥知んよのあつれ

其角

あつらひの鳥知んよのあつれ

麦林

あつらひの鳥知んよのあつれ

蕪村

あつらひの鳥知んよのあつれ

芭蕉

あつらひの鳥知んよのあつれ

其角

雉子

其角

終るも母は遠くはるく廣那る

沾徳

尾をひきかき草はるく終る

言水

あつらひの鳥知んよのあつれ

其角

あつらひの鳥知んよのあつれ

其角

あつらひの鳥知んよのあつれ

其角

あつらひの鳥知んよのあつれ

其角

あつらひの鳥知んよのあつれ

其角

あつらひの鳥知んよのあつれ

其角

あつらひの鳥知んよのあつれ

其角

あつらひの鳥知んよのあつれ

其角

あつらひの鳥知んよのあつれ

其角

あつらひの鳥知んよのあつれ

其角

あつらひの鳥知んよのあつれ

其角

あつらひの鳥知んよのあつれ

其角

あつらひの鳥知んよのあつれ

其角

あつらひの鳥知んよのあつれ

其角

雀子
親雀
蝶

帆柱のせきまうりあう。はちきり
ま即て早まよかともあや夕きり雀
雀子やしらうり信よの並の影
あうまうりやうけうり後や親雀
即ちうり吾友うりぬる小蝶
百もせうぬるう葉のうりうり
移むる蝶あうりうり信をうりうり
葉屑よ雀をうりうりうり
蝶うり中様をうりうり信をうり
うりうりや松ふりうり獸のうりうり

其角

麦林

其角

蕪村

芭蕉

其角

蛙

夕日乾町中よあうりうり
角うりうりうりうりうり
あうり蝶あうりうりうり
うりうりうりうりうり
玉川や燈をうりうり
葉池ようりうりうり
あうりうりうりうり
あうりうりうりうり
うりうりうりうり

嵐雪

末山

蕪村

言水

素堂

其角

嵐雪

若狭の月を啼くくはむの舟
 希因
 来山
 惟一土のきこんちの種
 蕪村
 舟の後よきとほくくはむの
 月まき桂うらむ田あう那
 日い日られよあちあひけよと啼煙
 周みさうしてきこんちの種
 連みさうしてきこんちの種

表廿五

池の煙瘴のほろよほたう屋
 嵐雪
 ほろよほたうのほろよほたう屋
 其角
 遠出よついのやうの煙瘴のこえ
 芭蕉
 貴殿よやうの煙瘴のこえ
 言水
 ほろよほたうの煙瘴のこえ
 其角
 猫のよやうの煙瘴のこえ
 其角
 猫のよやうの煙瘴のこえ
 其角
 猫のよやうの煙瘴のこえ
 其角

暮
猫

大井川

思作

春雨

まろのや 鴨のさまはら。よのりり
びのちりり。かすし日流る
まろのや 節。さりの。を。花。し
細。ま。く。は。ら。り。の。の。の。
湯士の。茶の。さ。も。の。の。の。
まろのや 巨魁の。か。の。の。
又。ま。ろ。の。の。の。の。の。
まろのや。の。の。の。の。の。
ほろの。の。の。の。の。の。
茶。の。の。の。の。の。の。

芭蕉

其角

希因

来山

麦林

五世

廿五

まろの。の。の。の。の。の。
まろの。の。の。の。の。の。
まろの。の。の。の。の。の。
まろの。の。の。の。の。の。
まろの。の。の。の。の。の。
まろの。の。の。の。の。の。
まろの。の。の。の。の。の。
まろの。の。の。の。の。の。
まろの。の。の。の。の。の。
まろの。の。の。の。の。の。

燕村

其角
 解のこころ高接くまきり
 候のいふはまの地を一同の那
 折葉ふや井筒うめて解のこころ
 孤解のこころ
 解中、そのまを解したくまきり
 ちとくくぬ解ふまをまき解ま
 うぬま女の解、いほくまをま
 き、いちのほま、いちの解の異
 右解中、い、の、人、乃、神、几、性

其角
 佑徳
 嵐雪
 蕪村

三十七

草餅
 笑をあらぬわをれんや解二対
 此のまをまらふはりれてま候ぬ
 夢のまをまはらん州の候
 傍解のまをまはらん抱まきり
 解の解子まをまら、道毛ま
 吹れまをまはらぬま中より合
 掃まをまはらん圓の清まら
 嵐雪のまをまらぬまはら
 曲の中解もさるまをまら
 曲の中、まをまらぬまら

草林
 嵐雪
 言水
 其角
 希周

曲水

白干 芭蕉
常程より川に流れてゆく干舟 沾徳

舟干 舟を流してゆく舟 言水

舟干 舟を流してゆく舟 其角

舟干 舟を流してゆく舟 其角

舟干 舟を流してゆく舟 其角

貝拾 来山
舟干のふれ舟は舟なり 舟干舟 沾徳

貝拾 其角
舟干のふれ舟は舟なり 舟干舟 其角

貝拾 其角
舟干のふれ舟は舟なり 舟干舟 其角

貝拾 其角
舟干のふれ舟は舟なり 舟干舟 其角

青精飯 嵐雪
相柳 民濃は菜飯の人 舟干 嵐雪

花鎮

井浦のふたや中村の。花鎮

言水

寒食

寒食の。寒食下の猫の目を怪しむ

其角

御身拭

御身拭淨土や水の誠後布

言水

桃

百枝の葉の濃ひらう中桃の意

沿徳

五柳歌

桃の目心解るる美人の笑わろく

嵐雪

無よとふらえられや春の桃

其角

きよふらふふもさく桃の意

希因

貝林

あふひの村の桃の目心

麦林

三十一

海棠

海棠の目心とてやさうりうを

希因

梨花

梨花の目心とてやさうりうを

蒸村

梨の目心とてやさうりうを

言水

中江新もふつりく花の速分堂 佑徳
 退付てぬけりる暇も来えいふ
 おととも花のつれせつれうめ 其角
 是を花のつれうめをさるりり
 彫画 徳義ふつりつせんは世が
 空なる中や海皮をさるりつるは
 中さけり中りぬりつり 寺さるり
 と花もつれうめをさるりつるは
 うさありや 佐^子意五さるりつるは
 と花もつれうめをさるりつるは

三長甲十一

花のつれうめをさるりつるは
 と花もつれうめをさるりつるは
 大佛 徳うめをさるりつるは
 中さるりつるは
 比 瓶 中 中さるりつるは
 極 本 屋 の 亭 中さるりつるは
 花のつれうめをさるりつるは

好ま万
を信す

花はつりてきてつるかぶく中のぬき
是よりまて都を幕のつりか
毎つてを表す所にては月代
を形みまふるぬ女中あまらり
月を中へは湯の寺社ありま
まより遠て敷きよき人教い
白きやまよりつりけを渡
まのまをぬきよきつりか
人を人をもての安やまよき
そのまよきつりかありまよき

其角

四十二

寸馬主人

花をゆい使者のあはれ月を
まよき海傍も信し 信 着
階直おやまのこまにわ成る
陸利ねんいさやまあまを
あまをまやまは成る信を
流海やまのこまにわ成る
はまよりまよきぬ人まよきの
出候人より延るまよきの
俣俣の敷らつらまよきの
かんまやまよりまよきの

其角

其角

芭蕉
 本のそとにけしきとてさうらうのれ
 心合てやまを松の影まはらうらう
 さうらうさうらう十景の影八をばらう
 人しよあまのしよまうらうの影
 也さうらうの影の影まはらうの影
 入あまの影まはらうの影まはらう
 徳林ふらうの影まはらうの影
 あらうらうの影まはらうの影
 夫の影まはらうの影まはらう

芭蕉
 言水

徳
 言水

存
 おらうらうの影まはらうの影
 也の影まはらうの影まはらうの影
 本の影まはらうの影まはらうの影
 さうらうの影まはらうの影まはらう
 影まはらうの影まはらうの影
 影まはらうの影まはらうの影
 影まはらうの影まはらうの影
 影まはらうの影まはらうの影
 影まはらうの影まはらうの影
 影まはらうの影まはらうの影

素堂
 其角

其角

御躰

とほりり本屋へ見のたしし計

其角

青

且夕のそりおろしむらにけしや

山

狂言

あり春を鳥羽へたてせん出はしし

山

野思

らるるは乾らんこころはしし

山

木

小きなきをまのけりけしし

山

奇

はけししやけりやう角槽

嵐雪

藤

けししけりけり山道の飯あし

蕪村

所

道なきをまのけりけしし

山

山

けししけりけりけりけりけり

山

山

やまの樹をけりけりけりけり

山

五十五

山

けししけりけりけりけり

其角

山

月なきをまのけりけり

言水

山

けししけりけりけりけり

希因

山

けししけりけりけりけり

表林

藤

けししけりけりけりけり

其角

山

けししけりけりけりけり

其角

山

けししけりけりけりけり

其角

山

けししけりけりけりけり

其角

山

けししけりけりけりけり

其角

小畑の女主人
の歌をよめる

蘇仙の歌をよめる
嵐雪

小畑の歌をよめる
来山

中畑の歌をよめる
希因

小畑の歌をよめる
蘇村

脊捨人の歌をよめる
希因

上橋の歌をよめる
希因

三美の歌をよめる
希因

萱

菖蒲

五十一

菖蒲 采舟又里の菖蒲の歌をよめる
其角

遅日 山々の尾をよめる
蘇村

炉塞 炉塞と南流の風をよめる
蘇村

降子鳥 松風成旨の歌をよめる
言水

柳 春の歌をよめる
其角

小畑 能小の歌をよめる
素堂

蚕

こし

別霜

行春

秋寒

望

盡日

暮

孫ももの春や一す山日何うも

あまこしひんをたふしんをたふしん

こまの世のなうをたふしんやあれお

行春とあいの人とあしんをたふしん

けしんや枝は枝枯れぬをたふしん

ゆきもや枝は枝枯れぬをたふしん

霞の鹽もそめてゆくもや

けしんや白き花の由枝のいよ

けしんや枝は枝枯れぬをたふしん

其角

来山

泊徳

芭蕉

其角

燕村

春の暮

暮春 或人よむと

春限り

春情

けしんや細なこまをたふしん

けしんや花をたふしん

けしんや花をたふしん

けしんや花をたふしん

けしんや花をたふしん

けしんや花をたふしん

けしんや花をたふしん

燕村

希因

燕村

其角

三十一

春成送

春よよまうて去るを遠くへ白きや

其角

晩春

春もよもや山に白く首若し

素堂

春盡

春のつひのさかたはいて仁義も

蕪村

春別

春の別れはさかたはいて仁義も

蕪村

暮春

暮春の別れはさかたはいて仁義も

蕪村

春の暮

春の暮の別れはさかたはいて仁義も

蕪村

春の暮

春の暮の別れはさかたはいて仁義も

蕪村

春の暮

春の暮の別れはさかたはいて仁義も

蕪村

俳諧十家類題集春之部終

五平三

